

泰澄生誕日の六月十一日については、この六月の降雪こそ白山信仰の源泉である雪の民俗信仰と命名した根拠であるが、この応当日に最澄示寂一週間後に大乘戒壇設立の許可が下りた日がある。さらに泰澄没年は神護景雲元年(正しくは天平神護三年)三月十八日であるが、その神護景雲元年に最澄が誕生している。しかも泰澄没後ちょうど五か月後のことであった。十八日といえば勿論、観音の縁日であり、加えて柳田氏によれば三月十八日は普通の日でないといい、何かかくれた由縁がありそうで興味がつきない。

こういった歴史の中の応当日と関連づけることは、菅原道真命日と釈迦入滅二月十五日とを因縁連想づけている『松崎天神縁起』など、説話が制作されるときの手段方法なのであって、畢竟『泰澄和尚伝』は唱導説話縁起だったのである。

『泰澄和尚伝』に登場する道昭、行基、玄昉の大徳についてみたい。道昭と玄昉は法相宗を請来したことで夙に知られており、その道昭に師事したのが行基である。法相宗は法華経、最勝王経をも行持し、道昭、行基、玄昉いずれも法華経に精通していた。そして泰澄も受持法華者(法華経者)であった。玄昉は左遷されただけに唱導にとつては不具合にもかかわらず、『泰澄和尚伝』の中で一定の役割を果たしている。それは泰澄が生きた時代と重なることから、泰澄自身の実在、行実の真实性と白山修験道の奈良時代からの伝統を強調したものに他ならない。が、その背景には久安三年(一一四七)に園城寺と延暦寺とで惹起した確執があったに相違なからう。法相宗は兜率天の弥勒を経説するが、「一乗(法華経は)方便」(『沙石集』)と

いい、大乘戒壇設立に護命らが反対したことで明らかのように、結局のところ白山修験道の立場があり、「悉皆成仏」を説く法華経を所依の經典とする比叡山の興隆とともに、白山は延暦寺末となっていくのであろう。

### 『日本靈異記』における仏教について

前島 康佑

本発表は、『日本靈異記』における仏教をどう理解するかという点に関して、先行研究の理解を批判した上で、新たな理解を提示する、ということを目指した。

具体的には先行研究では、『日本靈異記』を、国家仏教に対する民衆仏教として捉えられている(吉田一彦氏『日本古代社会と仏教』など)。国家仏教と民衆仏教という二項対立の枠組みで、『日本靈異記』における仏教を捉えようというのである。しかしながら、こうした理解にはいくつかの問題点が存すると思われる。

第一に、国家仏教概念と民衆仏教概念の議論の水準がずれている、という点が挙げられる。国家仏教概念(国家仏教論)というものが、政策・政治的制度(「僧尼令」などに代表される)なのに対し、民衆仏教概念が信仰や活動内容などの水準に捉えられているのである。これでは、国家仏教と民衆仏教が対応関係にあるとは言えず、二項対立の枠組みとして捉えるのには不適切と考えられる。

第二に、『日本靈異記』における私度僧と官僧の問題である。吉田一彦氏や多田一臣氏などは、私度僧が活躍する説話が『日

本霊異記』の基調になっているとして、私度僧(民衆仏教)と官僧(国家仏教)という二項対立の理解のもと、『日本霊異記』を民衆仏教の書として規定している。しかしながら、この理解にも問題がある。その問題とは、明確に私度僧(「自度」と捉え得る僧はわずか七例しかない、『日本霊異記』においてそもそも私度僧と官僧の別が明確に意識されているとは思えない(入部正純氏『日本霊異記の思想』)、といった点である。このことより、『日本霊異記』は私度僧をのみ称揚しようとするのではなく、僧一般を称揚する意識が働いていると考えられる。以上二点より、先行研究の理解である、『日本霊異記』における仏教は民衆仏教である、という理解は首肯しがたい、と言える。

次に、本発表の『日本霊異記』における仏教の理解を論じる。言うまでもなく、『日本霊異記』の中心となるところは、仏像・経典・僧という三宝のうちに生起する因果応報譚であるが、このとき、三宝は仏法の具体的なあらわれとして理解し得ると思われる。仏像は「法身仏」として、経典は法を説くものとして、僧は法を修し広める存在として、である。別言すれば、仏法という何らか位相の高い抽象的な概念の仲介として、三宝が因果応報の論理を人々に示す、とも言えよう。なお、用語に関して言えば、「法」「仏法」だけでなく「天」「極楽」もほぼ同義的に用いられていることが指摘できる。

このような『日本霊異記』における仏法という概念は、天皇や神にも敷衍し得る。天皇に関して言えば、先行研究でしばしば指摘されているように、『日本霊異記』には天人相関思想(災

異説)、またそれにもとづいた王土王民思想の影響がみられる(堅田理氏『日本の古代社会と僧尼』など)が、中巻序文の記述をみれば、やはり仏法と人々(日本国土)の仲介として天皇が描かれていると言える。神に関しても、神身離脱の思想がみられる下二四縁の理解として、神は仏法と人々の仲介として捉えることができよう。そして、このような仏法とその仲介としての三宝・天皇・神というものが、『日本霊異記』における仏教を理解する上で重要となるのではないだろうか。